



2013年12月6日(金) 16:30~18:00 / 6号館110スタジオ

●図書館テーマ展示●

期間：2013年11月12日～12月14日

展示場所：図書館ブラウジングルーム

# 音楽・人・メディア

## 変わりゆく音楽の価値

2013年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会専門ゼミ

### 研究発表会

日時：2013年12月6日（金） 16時30分より

場所：6号館110スタジオにて

### 目次

はじめに	・・・・・・・・・・	2
展示資料	パネル	・・・・・・・・・・ 2
展示資料	図書	・・・・・・・・・・ 4

---

ポスター&表紙：たからまはや高良真剣（多摩美術大学）

## はじめに

「音楽の価値」とは何か、皆さんは考えたことがありますか？

音楽に価値はあるのか、それは何によって決まるのか...難しい問題ですが私たちは考えてみることにしました。

今回、私たちは音楽の価値を探るため、メディアに焦点を当てて考えてみました。楽譜、雑誌、テレビ、ラジオ、CD、レコード...これらのメディアを通して見えてくる「音楽と人とのつながり」「音楽の価値」とは...？

展示に合わせて、12月6日(金)16:30~18:00より、6号館110スタジオにて研究発表会を行います。皆様のご来場、お待ちしております！

## 展示資料

### 《パネル》

- ・『コンサートの文化史』ヴァルター・ザルメン 上尾信也/網野公一訳 柏書房 1994年(請求番号 C58-859) p.167 図82「ホームコンサート」  
ホームコンサートは、17世紀初頭からブルジョワ邸宅などで催されていた。  
J.R.ホルツハルプ作の銅版画。チューリッヒの音楽グループの新年の機関紙に掲載、1777年。バーゼル、銅版画美術館蔵。
- ・『人はなぜ音楽を聴くのか』デイヴィッド・J.ハーグリーヴズ、エイドリアン・C.ノース編 磯部二朗(ほか)訳 東海大学出版会 2004年(請求番号 J101-676)p.161「ロンドンの物売り」  
ロンドンの物売りの絵と、その呼び声の節回しを五線譜にしたもの。物売りたちはそれぞれ特有の節回しで売り物を宣伝していた。物売りの声も、一般市民にとっては親しみのある音楽だったかもしれない。
- ・『西洋の音楽と社会 後期バロック 「爛熟した貴族社会とオペラ」』ジョージ・J.ビューロー編 関根敏子監訳 音楽之友社 1996年(請求番号 C60-791)p.208 図25「音楽愛好家」  
ユリウス・クインクハルト作。アムステルダムの家庭で、フルート、ヴァイオリン、バス・ヴィオールでトリオ・ソナタの演奏を楽しむ人たち(1775)。自分たちが弾いて楽しむものとしての音楽の姿が描かれている。

- ・「『国民歌』を唱和した時代 昭和の大衆歌謡」戸ノ下達也 吉川弘文館 2010年  
(請求番号 J119-053) p.111 図 11「太平洋行進曲」  
東京日日新聞社が海軍省の委嘱を受けて実施した作詞・作曲によって国民歌「太平洋行進曲」はつくられた。そして、海軍協会と東京日日新聞社の主催海軍省の後援で「海軍省選定歌太平洋行進曲発表会」が開催された。
- ・「ラジオの時代 ラジオは茶の間の主役だった」竹山昭子 世界思想社 2002年 (請求番号 J096-512)表紙の絵  
海辺のサロンでラジオを聞きながらくつろぐ女性たち。モダンなファッションと高性能のラッパ(スピーカー)つきラジオ受信機、モダニズム期のあこがれの装置であった。(三越のPR誌『三越』1925年9月号より)  
洋服を着てお茶を飲みながらラジオを聞いている女性たちは、ラジオというあこがれの装置に、どんな未来を重ねていたのだろうか。
- ・「LP レコード新発見 オーディオの深淵に棲む魔物に迫る」山口克巳 誠文堂新光社 2005年 (請求番号 J106-867)p.76-77、290
- ・「J ポップとは何か 巨大化する音楽産業」鳥賀陽弘道 岩波新書 2005年 (請求番号 J104-934)p.33、34、35
  - p.33 1982年に世界で初めてCDが市販されたことを記念した碑。この記念碑は静岡県のソニー・ミュージックマニュファクチャリング大井川工場に立てられている。世界で初めてプレスされたCDは、ビリー・ジョエルの『ニューヨーク 52番街』や松田聖子の『Pineapples』など。当時これらのCDは3,800~4,500円という値段で販売されていた。
  - p.34 82年にCDと同時にソニーから発売された。CDプレイヤー第一号機「CDP-101」。価格は168,000円と、当時としては驚きの値段が設定された。そのためか、このプレイヤーの購買層はほとんどがクラシックやジャズを聴くようなオーディオマニアに限られていたそうだ。
  - p.35 84年になってもアナログ盤の10分の1しか生産されなかったCDの普及率を見たソニーが、CDプレイヤー第二号機として発売した「D-50」。価格は製造原価の半分である49,800円まで引き下げられた。サイズも「CDジャケットを4枚積み重ねた大きさ」になった。

## 《図書》

### ～メディアのなかった時代 人々にとって音楽とは？～

- ・『音楽演奏の社会史 よみがえる過去の音楽』大崎滋生 東京書籍 1993 年（請求番号 C57-870/C57-871/C57-872）

なぜクラシック音楽のほとんどが過去の音楽であるのかという点に注目し、クラシック音楽の演奏の歴史をその当時の社会的背景と関連させて論じられている。時代によって異なる音楽文化のあり方を概観することで、現在の音楽文化を見直すことができる。

- ・『コンサートの文化史』ヴァルター・ザルメン 上尾信也/網野公一訳 柏書房 1994 年（請求番号 C58-859）

コンサートの起源と発展、会場、聴衆、協会、マネージメント、批評、プログラムとポスター、歴史上に存在したコンサートの様々な形態について書かれている。

- ・『新編 音楽家の社会史』西原稔 音楽之友社 2009 年（請求番号 C26-887/C43-062/C43-882）

19 世紀ヨーロッパを中心に、当時の音楽生活が音楽家の活動やその当時の風俗や社会状況を通して論じられている。音楽家の一日など、当時の経済状況や社会情勢と密接に関わる音楽家の生活が生き生きと描かれている。

### ～紙メディアの登場～

- ・『クラシック音楽史大系 5 ロマン派の音楽』フィンシャー、ルートウィヒ 寺西春雄日本語版監修 東京：パンコンサーツ 1985 年（請求番号 C8-749）

作曲家の生涯や作品が、関係する絵画や写真と共に説明されている。この第 5 巻では、音楽におけるロマン主義、ウェーバー、ベルリオーズ、ショパン、メンデルスゾーン、シューマン、リスト、ロマン派初期の音楽の展開について書かれ、作曲家の生涯や作品が関係する絵画や写真と共に説明されている。

- ・『音楽と中産階級 演奏会の社会史』ウィリアム・ウェーバー 城戸朋子訳 法政大学出版局 1983 年（請求番号 C36-678）

17 世紀末からハンプルグやパリで始まった演奏会について、特に 1830 年～48 年のウィーン、パリ、ロンドンでの、現在の演奏会形態が誕生していく過程に焦点を当てて書かれている。演奏会そのものの様子だけでなく、当時、音楽を聴いていた人々について考察しており、ウォークマンなどが登場する以前の人々の様子を知ることができる。

- ・『**音楽史の形成とメディア**』大崎滋生 平凡社 2002年 (請求番号 J97-361)  
西洋音楽史は音楽そのものの伝承によってではなく、音楽を記録・伝達するメディアによって形成されてきたという観点から音楽史研究のあり方について言及している。音楽を社会史の中に位置付けることがこれからの音楽史研究の課題であると述べられている。
- ・『**雑誌 音楽世界**』東京音楽学校同聲舎編 音楽之友社 1958年 (請求番号 P0602 9(11))  
1907年から出版が始まった『音楽世界』は、当時とても大衆的な存在であった。コラムや批評記事の他にも楽器店や蓄音機、スポーツ用品、ゲーム機などの広告も多く載せられているのが特徴である。
- ・『**雑誌 音楽雑誌**』復刻版 出版科学総合研究所 1895年 (請求番号 P1276 50-60)  
1890年から出版が始まった『音楽雑誌』は、日本最古の音楽雑誌と言われており、当時は唯一の音楽専門誌であった。まだ西洋音楽があまり普及していなかったためか、西洋の作曲家や作品についての記事はあまり見られない。
- ・『**雑誌 音楽文化**』日本音楽雑誌 1944年 (請求番号 P0639 2(7))  
1943年に出版が始まった『音楽文化』は、現代邦楽や合唱、愛国歌、民謡、国民合唱、などについて取り上げられており、主に日本の音楽について紹介する雑誌であった。また、地方で活動をする合唱団などの紹介文も掲載されていた。
- ・『**『国民歌』を唱和した時代 昭和の大衆歌謡**』戸ノ下達也 吉川弘文館 2010年 (請求番号 J119-053)  
この本では、「国家目的に即応し国民教科動員や国策宣伝のために制定された国に準じた機関による『上から』の公的流行歌」、国民歌が、国家機関はもちろんのこと、新聞という当時もっとも大衆に親しまれていたであろう活字メディアによってつくられていた状況を、十五年戦争の流れに沿って見ている。そしてつくられた国民歌は、ラジオ放送や舞台芸術上の劇中歌といった形で戦略的に国民への浸透が図られることになるのだが、その様子も詳しく書かれている。  
国民全体が戦争に駆り出されたある意味「異様な」当時の社会の中で、音楽はどのような価値を持たれ、どのような役割を果たしたのか。この本でその様子を垣間見ることができる。
- ・『**総力戦と音楽文化 音と声の戦争**』戸ノ下達也 青弓社 2008年 (請求番号 J114-364)  
この本は、洋楽文化史研究会と日本音楽学会関東支部の合同例会として2006年9月9日に東京大学で開催したシンポジウム「戦争・メディア・音楽 - 二つの大戦と日本の音楽文化 - 」で提示された問題を軸に、それに関連するテーマを論じた論文集である。

第1章「音楽の総力戦」では、「戦争・メディア・音楽」のテーマを見通し、そこから見えてくる「戦争の時代」の音楽文化の課題を抽出することに主眼が置かれている。内容としては、「国民大衆と大衆歌謡、特に映画主題歌との関わり」や、「大東亜共栄圏での文化政策の一つとしての音楽の分析」などについて書かれている。

続く第2部「音楽の諸相」は、シンポジウムでの問題提起をもとに、洋楽文化史研究会会員がそれぞれの問題意識に引き寄せて書き下ろした論文で構成している。内容としては、「1930年代の日本人作曲家の創作理念」や、「ラジオ時代の洋楽文化」などについて書かれている。

「戦争と音楽」というテーマの中でさまざまな書き手がさまざまな切り口でその実像に迫っていて、とても読み応えのある内容となっている。

・『越境する近代5 音楽を動員せよ 統制と娯楽の十五年戦争』戸ノ下達也 青弓社 2008年  
(請求番号 J112-989)

この本では、戦争の時代に多様な観点から導かれた「音楽による動員統制や娯楽」といった要因を意識しながら見通していく。

第1章では、日本が戦争に突入する前の時代の洋楽の需要と拡大について見ていく。第2章では、十五年戦争期の音楽界がどのように国家統制の枠に組み入れられていたのか、また上からの統制に対して音楽界がどのように認識して対応したのかということをも明らかにしていく。続く第3章と第4章では、「歌」に焦点を当て、ラジオ放送や移動文化運動など戦時期特有の音楽の活用から、そのメディアとしての役割を浮き彫りにする。第5章では、戦時期アジア地域に膨張していく占領地各地でどのように音楽が活用されたのかについて考えていく。そして第6章では、第1章から第5章で論じてきた戦時期の音楽をめぐる動向が、戦後にどのような形で結びついていくのか考察していく。戦時期の音楽事情について述べるだけでなく、戦後にも目を向け流れを見ているので、「十五年戦争」という一つの時代が我々の生きる現代と無関係ではないということが実感できる本となっている。

～現在のメディア 様々なメディアの誕生～

・『拡散する音楽文化をどうとらえるか』東谷護 勁草書房 2008年 (請求番号 J114-697)

20世紀以降、複製技術の発展により大量配給が可能となった「商品化された音楽」、すなわちポピュラー音楽は、どのように社会と繋がっているのか。様々なメディアを通して音楽を聴いている現在を、「それってどうなの？」と今一度考え直した本である。

・『毎日ワールドミュージック』北中正和 昌文社 2005年 (請求番号 J111-599)

世界中の音楽とそのCDを紹介した本。キューバのソン、インドネシアのガムランのよう

な音楽の種類ごとにまとめられている。ここでは世界中の音楽を紹介している。また、例えば、キューバのサンのページを開くと、ほかにはどのページにキューバの音楽が載っているのか一目で分かるようになっており、ついいろんなページを開いてしまいたくなる。だが、一番の特徴は項目ごとにおすすめの CD を紹介していることではないだろうか。

- ・『**聴衆の誕生** ポスト・モダン時代の音楽文化 』渡辺裕 春秋社 1989 年 (請求番号 J101-474)

クラシック音楽の歴史を通して、西欧近代に誕生した"聴衆"の発展・変貌・崩壊のプロセスを音楽及び芸術文化全般の動向の中で捉えようとした画期的な文化論。クラシック音楽の"聴衆"に真っ向から向き合ったユニークな一冊。

- ・『**CD はこう生まれ未来をこう変える** オーディオから電子出版まで 』天外伺朗 ダイヤモンド社 1986 年 (請求番号 J64-867)

CD、オーディオ、電子出版の仕組みや成り立ちについて分かりやすい言葉で書かれた解説書。本書内に登場するキャラクターたちが会話形式で解説するコーナーもあり、幅広い年齢層が読みやすい一冊となっている。

- ・『**音楽する社会**』小川博司 頤草書房 1988 年 (請求番号 J62-332)

本書では音楽化の進行による人間コミュニケーションの変容の特性を明らかにするために、音楽そのものの持つ特質の考察、現代における音楽化の具体的な展開の把握、音楽化の現代的意識を明らかにするといった作業を行っている。また、本書の1部にある「音楽化社会の構図」ではメディアとサウンドスケープの関係を軸に、メディア(装置)と人間と音・音楽との関係を考察している。この章は今回の研究発表会と関係性が深いので、是非読んでほしい。

- ・『**LP レコード新発見** オーディオの深淵に棲む魔物に迫る』山口克巳 誠文堂新光社 2005 年 (請求番号 J106-867)

レコードを聴く際、そのレコードそのものはどういう位置にあるのか、を考えるべきではないだろうか。1枚のレコードにおける演奏者あるいは製作者の意図から著者の紹介する作品を例に推測していく。また大まかなレコードの仕組みや歴史も説明されており、レコードに対する理解をより深める本である。

- ・『**LP レコードの逆襲**』かまち潤 毎日新聞社 1991 年 (請求番号 C54-477)

技術の発達と時代の流れによりアナログレコードが衰退し CD にその位置を取って代わられた。確かに CD は私たちと音楽との距離を縮めたが、一方でレコードにあった「音

楽を聴く」という行為の魅力が失われてしまった。メリット、デメリットまたレコードの今後の展開も含め、もう一度アナログレコードについて考え直し、見直すきっかけとなる本である。

・『ラジオの時代 ラジオは茶の間の主役だった』竹山昭子 世界思想社 2002年（請求番号 J96-512）

ラジオがどのように誕生し人々に受け入れられていったのか、またラジオの特性を生かした番組やイベントなど、ラジオが独自に生み出したものたちと密接に関わらせながら、ラジオというメディアについて再検討していく本である。

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>

2013/11/12 編集 国立音楽大学附属図書館広報委員会 : 撰正弘・田村和子